



# からこかぎ

第23号 平成30年11月 3日(土)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会  
 〒 636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内  
 TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

## 遺物紹介 前漢鏡 (清水風遺跡 出土品)

会報編集グループ

### 1 概要

今回は、第三室「唐古・鍵遺跡周辺遺跡の逸品」のコーナーで展示されている前漢鏡を紹介します。前漢鏡は、唐古・鍵遺跡の北端から北へ600mに位置する清水風遺跡の第2次調査(1996年調査)で出土しました。清水風遺跡は、標高46m前後の沖積地にあり、第1次調査(1986年調査)では、中期の集落域と墓域が検出される一方、生活痕跡を示す木製品や石器の出土が少なく祭祀場と評価されていました。また、遺跡中央を北に流れる旧流路が検出され、唐古・鍵遺跡第1次調査(唐古池)で検出された北方砂層(南東～北西方向の中期の流路)と一連の河跡とされています。

第2次調査では、中期後半(掘立柱建物2棟、井戸2基、土坑2基、河川跡2条)と後期後半(方形周溝墓2基、土坑2基)さらには古墳前期前半(土坑2基)が検出され、3時期の遺構面が判明しています。出土遺物は、絵画土器を含む多量の土器・泥除未成品・蔽石など日常用具とともに鏡片がありました。

### 2 前漢鏡

(1) 形状 報告書によると、出土した前漢鏡(下写真:インターネット画像)は、縁の3分の1程度の破片で弥生中期後半～庄内期の遺物包含層からの出土です。鏡の直径を復元すると6.7cmほどで、重さは8.08gの小型の破砕鏡片です。その縁は4mmほどの幅があり、その縁の内側に幅2mmほどの櫛歯文を配置した前漢期の日光鏡(重圏文鏡)とされています。鏡縁端部は著しく磨耗していますが破面を磨いた痕跡がないとのこと。前漢鏡の特徴は、鏡背を同心円の文様で構成し二重の円帯(銘帯)に特殊な字体の銘文を持つ点です。出土した鏡は、銘帯部が欠損していて銘文が確認できません。従って、報告書では、前漢鏡ではないという人もあり、評価について課題が残るとしています。また、人手時期も、弥生中期～庄内期までの土器を含む包含層からの出土で検討の余地があるとしています。



(2) 伝世鏡 前漢期(紀元前202年～紀元8年)に制作された前漢鏡は、朝鮮半島に楽浪郡(武帝・紀元前108年)が設置されて以降、北部九州を中心に多く出土しています。当時は、『漢書』地理志に「楽浪海中有倭人、分為百余国、以歲時來獻見云」と記されているように小さな国々が分立していた時代です。前漢鏡の大部分は、「伊都国王墓」とされる福岡県前原市三雲南小路遺跡や「奴国王墓」とされる須玖岡本D地点をはじめ中期後半に現れる北部九州の各地域を支配する有力首長の墳墓(甕棺墓)に多数副葬されていて、弥生時代中期後半の北部九州では階層分化が進行していたことがうかがえます。いずれも前漢皇帝より下賜されたもので時間をおかずに副葬されたと考えられています。

一方、近畿では、清水風遺跡の外に大阪市瓜破北遺跡と神戸市森北町遺跡の3箇所から出土しています。近畿の3件は、使用は弥生時代終末期(庄内期)から古墳時代前期まで下るとされ、いずれも、大陸から

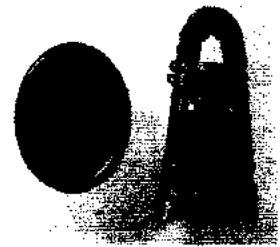
もたらされ、国内で長期間にわたって伝世した鏡と考えられています。

(3) 破鏡 時期の特定にあたり、破鏡に注目します。破鏡の風習は、弥生後期までは北部九州を中心になされ、その破断面の研磨や穿孔が施されていました。そして、弥生終末期には北部九州の外に破鏡の風習が及んだと考えられています。

また、出土した鏡は、北部九州の出土例(1墳墓に1埋葬主体で複数青銅鏡を副葬)と異なり、集落域からの出土で集落内の祭祀具として使用されたものとみられ、弥生終末期においても、奈良盆地内では階層の分化が顕著でなかったものと考えられます。

### 3 多鈕細文鏡

前漢鏡より早く国内に伝来したのは、中国鏡でなく多鈕細文鏡です。紀元前2世紀(中期中葉)ごろに、朝鮮半島から中国東北部製作の多鈕細文鏡が日本列島に現れます。国内では11箇所12点が発見されていて、大半は北部九州で8枚です。近畿では、大阪府柏原市大泉遺跡と奈良県御所市長柄遺跡(流水文横帯文外縁付鈕銅鐸と共伴)から出土しています。多鈕細文鏡は、鏡背に複数の鈕を付け、緻密な細い線で文様を描いています。大泉遺跡と長柄遺跡の多鈕細文鏡(左写真:長柄遺跡の同伴した鏡と銅鐸:インターネット画像)は埋納され、集団(集落)の祭器として使用されていたものと考えられます。一方、北部九州では壙棺など墓の副葬品として使用され、中期後半の王墓の副葬品に連なる階層分化の萌芽が見て取れます。因みに、多鈕細文鏡は、楽浪郡の設置前にはその製作は終わっていたとみられています。



### 3 唐古・鍵遺跡の青銅鏡

遺跡西南部の第14次調査(1982年)では、弥生前期・後期・中世の遺構面が検出され、弥生期でなく中世の遺構面から青銅製鏡(左写真:インターネット画像)が1面出土しています。縁辺が欠損した長径3.7cm(復元想定径3.9cm)・幅3.2cm・重7.9gの小型品です。鏡は無文様で外縁部に端面が全く無いことより鏡というよりも「銅滓」のようにもみえます。調査報告書では、調査区では三つの遺物包含層の中でも中世の遺物出土量が少ないことより、「青銅鏡」は、弥生後期とし遺跡内での铸造の可能性が高い仿製鏡としています。仿製鏡は、庄内期以降に中国の日光鏡をモデルに小型で文様を単純化した鏡が国内でも多数作られ、近畿からも出土例(大阪府亀井遺跡・田井中遺跡・池島福万寺遺跡など)が増えてきています。出土品については、時期の特定に課題は残っています。



今回は、国内に初めて登場した多鈕細文鏡から前漢鏡を経て仿製鏡に至る弥生時代の青銅鏡の変遷を展示遺物に関連し紹介しました。唐古・鍵遺跡出土の青銅鏡は、リニューアル前は展示されていましたが、残念ながら、現在は展示されていません。

### お詫びと訂正

からこかぎ第22号2ページに掲載しました文書に印刷ミス(文字化け)がございました。玉稿をいただきました文化財保存課 課長 中尾澄子様をはじめ関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げますとともに訂正いたします。

(誤) 田 史跡公園の開園により、総合的な学習を含め……

(正) 史跡公園の開園により、総合的な学習を含め……

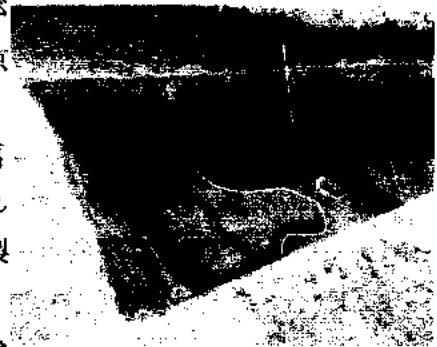
**遺跡紹介 平城京左京三条二坊十四坪（下層：水田遺構）**

弥生ウォーク世話人グループ

1 位置

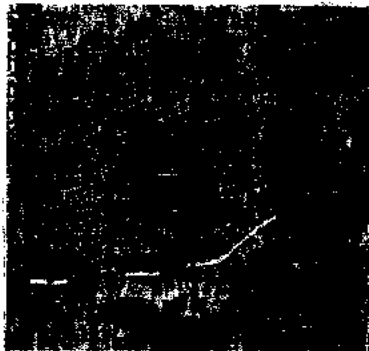
今回は、旧奈良警察署跡地で検出された水田遺構を紹介します。奈良県が推進している「新ホテル・交流拠点事業」に伴う事前調査(調査面積:8100㎡)で検出され、下層遺構面(5500㎡ 溜池エリアを除く)の全域から小区画水田・流路・水路が検出されました。下層遺構の調査は、平成28年4~7月に実施されています。水田耕作土から採取された炭化材の放射性炭素年代は、中西遺跡・秋津遺跡の前期水田社の数値(紀元前5世紀)と近似すると報告されています。

なお、調査地南西隣接地から、奈良市の平成9年度調査(平城京跡375次:左京三条三坊三坪)で弥生時代中期末~後期初頭の旧河川と溝・井堰が検出され、水田経営が予測されていました。また、平成24年調査(平城京跡655次:左京三条二坊十一坪)では、東西の畦畔(東側高さ10cm長さ1m幅80cm、西側高さ5cm幅50cm西へ広がり)とその間に灌漑用水の水口(幅55cm)そして水田跡(幅1.4m深さ14cmの溝状の窪み)が検出され(右写真:下層畦畔遺構:調査報告書)、あわせて前期の流紋岩製石包丁が出土して、前期の水田社の可能性が指摘されていました。今回の水田遺構の検出で、前期水田が周囲に広がっていたことが分かりました。なお、遺跡の発掘報告書は未発表ですので、調査概報と現説資料を基に報告します。



2 検出遺構

検出された弥生前期の水田社(下写真:現説資料)で、当時の水田経営が復元できます。調査区は、奈良盆地北の平城山から平城京の南にのびるなだらかな丘陵先端部の裾部(標高60m)に位置し、北東が高く西に低い起伏のある緩傾斜を利用した小区画の水田であったと思われます。出土遺物は、流路の上層の覆土層から畿内第Ⅱ様式土器片が出土し、その下層から畿内第Ⅰ様式土器片が出土し、あわせて結晶片岩製の石包丁4点が出土しています。石包丁が、流紋岩でなく結晶片岩製であることから弥生中期に近い時期の前期水田と考えられます。それは、検出地層からも裏付けられます。



盆地北の平城山から平城京の南にのびるなだらかな丘陵先端部の裾部(標高60m)に位置し、北東が高く西に低い起伏のある緩傾斜を利用した小区画の水田であったと思われます。出土遺物は、流路の上層の覆土層から畿内第Ⅱ様式土器片が出土し、その下層から畿内第Ⅰ様式土器片が出土し、あわせて結晶片岩製の石包丁4点が出土しています。石包丁が、流紋岩でなく結晶片岩製であることから弥生中期に近い時期の前期水田と考えられます。それは、検出地層からも裏付けられます。

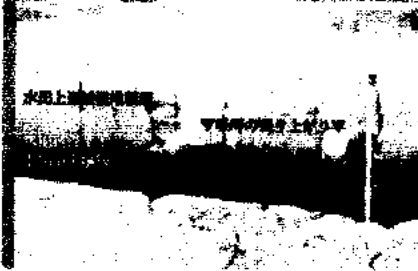
(1) 小区画水田

弥生中期初頭の洪水砂層とみられる灰色シルトの堆積層(50cm程度)の下層の黒褐色のシルト層(2~3cm)から検出された水田は、長方形(3.5m×2m程度)で面積は6~8㎡の総計580面の小区画水田(右:水田遺構写真:現説資料)が検出されました。水田は、地形の傾斜に沿って南北に27列と数えられています。列は隣接して繋がっており、当時は、「あぜ越し」の給水方式であったことが分かります。




水田耕作土(作土)はシルトの1層のみで、その厚さは薄く1~3cm程度と報告されています。現在の水田の耕作土層は、20cm前後とされ、根が70%ほど入るといわれていますが、当時は、極めて薄い耕作土層で、そのため、根が浅いのみならず大気温の影響を受けやすく、きびしい生育条件であったものと思われる。


ます(下：地層写真：現説資料)。

昭和期は、板付遺跡や登呂遺跡(近年の再発掘の結果、小区画水田であったことが判明)の検出水田が  

 大区画でしたので弥生期は一定規模の大区画の水田と考えられてい  
 ました。近年は、発掘の精度があがり、弥生期の水田は、20~30㎡程度  
 の小区画水田とするのが定説化しています。最近発見された奈良県  
 の前期水田遺構(御所市中西・秋津遺跡・玉出遺跡、橿原市萩之本  
 遺跡など)も同様です。問題は、何故小区画であったかです。従前は  
 限られた労働力に求める意見もありましたが、現在は、当時の水田の  
 湛水(水をたたえる)能力が十分でなかったためとする意見が有力となっています。当時の水田は、床土  
 (粘土層でなくシルト層)がなく耕作土もシルト層のため透水性が高く(水分の縦方向に浸透する)、水  
 田に水をまわしきるには小区画であることが必要であったと考えられます。なお、水田址で多く報告され、  
 水田面を踏み固める痕跡とみる意見もある「足跡」ですが、今回調査では検出されませんでした。

(2) 流路と水路

調査地北辺から幅4m深さ0.8~1.3mの流路(東→西)が、ま  
 た、その流路から分岐する溝(水路)が2条検出されました。  
 水路(右水路遺構写真：現説資料)は、給排水路と想定されて  

 いますが、流路の連結箇所を含め特別な導水遺構(施設)は確  
 認されていません。なお、調査地西北辺の流路内下層覆土から  
 流路の横幅を遮る杭や矢板が合掌形に組まれた堰状遺構(しがらみ)が検出されています。流路の制水  
 に苦勞した集落活動の痕跡と考えられます。

(3) 畦畔

水田面の周囲では2~3cmの土を盛り上げた畦畔(手あぜ)が検出されています。畦畔は、現地説明会  

 資料(左：画像)に見られるとおり、大畦畔(幅1~1.5m東北東-西南  
 西)と小畦畔(幅30~50cm)に区分でき、大畦畔と平行する幹線小畦  
 畔とそれに直交する支線小畦畔とに分類されます。2~3cmといった浅  
 い畦畔は、一区画の水路用水量が少量であったことを裏付けています。  
 なお、畦畔は修復した痕跡が無いとの報告があり、短期間の水田経営で  
 あったことが推測され、さらに水田耕作層も1面のみで極めて薄いこ  
 とことから、その生産性も低かったものと思われます。

第25回 弥生ウォークのご案内

~ 平等坊岩室遺跡・唐古鍵遺跡と周辺弥生集落

弥生ウォーク世話人グループ

前栽駅→前栽遺跡→平等坊岩室北遺跡→平等坊岩室遺跡→稲葉遺跡→嘉幡遺跡→(下永東城遺跡)→(下  
 永東方遺跡)→清水風遺跡→(吉田遺跡)→唐古・鍵遺跡(遺跡公園：昼食)→(法貴寺北遺跡)→(海知  
 遺跡・東井上遺跡・阪手遺跡)→小阪里中遺跡→小阪細長遺跡→小阪榎木遺跡→法貴寺斎宮前遺跡→阪  
 手東遺跡→唐古鍵考古学ミュージアム ( )遺跡は、遠望。

## 1 はじめに

今回は、オープンした唐古・鍵遺跡史跡公園とリニューアルした唐古・鍵考古学ミュージアムを訪れます。その前に、唐古・鍵遺跡から北西3kmの距離にある平等坊岩室遺跡を訪れ、近接する大規模集落を比較し、唐古・鍵遺跡を再確認したいと考えています。また、唐古・鍵遺跡周辺の後期段階を中心とした集落遺構も確認します。詳細は、当日ということで、以下、訪問予定の遺跡を簡単にご報告します。

なお、今回訪問する遺跡は、7年前に訪れた遺跡がありますが、時間も過ぎていきますし、新たな見方ができるかと思っています。

## 2 前栽遺跡

最初に訪れる前栽遺跡は、標高55mの旧布留川が形成した扇状地に位置し、東から西に扇状地特有のふくらみを持った傾斜地に立地しています。遺跡からは、縄文時代晩期を中心に土器が多数出土し、檀原遺跡・曲川遺跡・竹之内遺跡などとともに奈良県を代表する縄文期の遺跡です。近年は遺跡南西端の自然流路から、弥生前期から後期にかけての土器が出土し、付近に弥生期の集落が想定されています。一方、遺跡西側から弥生中期初頭の方形周溝墓が5基検出されていて、その内4基は溝を共有しています。弥生期の奈良盆地では単体型の埋葬主体が多いのですが、周溝の共有は血縁関係を有した墳墓群であることを示しています。この墓域は、平等坊岩室遺跡との関連が指摘されていますが、前栽遺跡との関わりも考えられます。また、北西1.5kmほどに位置し、弥生中期を中心に多数の方形周溝墓(溝を共有する群構成)が検出された八条北遺跡との関連も気になります。

## 3 平等坊岩室遺跡

前栽遺跡より西南500mに平等坊岩室遺跡があります。沖積地形の唐古・鍵遺跡と異なり旧布留川が形成した扇状地端部に立地し標高は52~54mです。東西250m南北600mの10000㎡の居住域を含む東西400m南北600mの範囲の大規模集落で、弥生前期より古墳前期まで継続する遺跡です。弥生前期前半に集落域が形成され、前期後半には本格的に環濠が掘削され中期前半には唐古・鍵遺跡よりも早く環濠集落が形成されています。集落の周囲には自然河道(北東→南西)が検出されその内側に環濠が確認されていて、排水機能を重視した環濠といえます。なお、集落内最高所の微高地では後期後半の方形区画(一辺30m)の溝が検出され、環濠内の中心施設とされています。方形区画は、弥生後期から終末期にかけて兵庫県加茂遺跡や滋賀県伊勢遺跡など畿内でも検出例があり、首長層の居館の萌芽とし階層分化の指標とする意見もあります。平等坊岩室遺跡では、方形区画の内部の発掘がなされておらずその実態は不明です。



また、遺跡南側の微高地から北に向かって緩やかに落ちていく地形を利用した畦畔状の高まり(幅40~50cm高さ5~10cm程度:上遺構写真:調査報告書)が数条検出されています。中央に溝(水口状施設)が掘られ、同時に出土した土器は、前期後半を示しています。今回訪れる阪手東遺跡で検出された畦畔状の遺構との比較から奈良盆地の弥生期の水田経営を確認したいと思っています。

平等坊岩室遺跡は搬入土器の出土量が多く、さらに銅釧や板状鉄斧や松菊里土器など重要な遺物も多く出土しています。

次に立ち寄る稲葉遺跡(中期後半の遺物出土)と嘉幡遺跡(前期末・中期後半・古墳前期の遺物包含

層・集落遺跡)からは、幅20m以上の旧流路が検出され、平等坊岩室遺跡に連なるとされています。

また、布留川南流と大和川との合流地点の吉田遺跡を遠望します、吉田池周辺の遺跡ですが、従来空白地帯とされていたエリアです。弥生前期の遺構(溝・小溝・ピット群)が確認され、弥生後期から終末期にかけての土器が出土しています。清水風遺跡や法貴寺北遺跡から1kmほどの距離にあります。

#### 4 周辺遺跡

唐古・鍵遺跡及び清水風遺跡は、「からこかぎ」別稿を参照いただき、今回訪問する周辺遺跡の概略を紹介します。

遠望となりますが、下永東城(ひがしんじょ)遺跡と下永東方(ひがしほう)遺跡は、前々回の弥生ウォークで訪れた庵治遺跡の北東に位置します。下永東城遺跡は中期前半の方形周溝墓が、下永東方遺跡は前期の自然流路と法貴寺北遺跡と同時期(後期末～庄内期)の方形周溝墓が検出されています。特に、庄内期の方形周溝墓が三河道跡・伴堂東遺跡・下永東方遺跡などで連続しており、付近での集落遺構の存在が予想されます。

唐古・鍵遺跡史跡公園などから遠望するのが海知遺跡です。旧海軍飛行場の跡地にあり、東方2kmに唐古・鍵遺跡があります。既に、飛行場建設の過程で弥生前期遺構が確認されていましたが、その後、海知遺跡からは前期中葉～中期初頭の多数の土器や結晶片岩の石包丁の未成品、また多くの土坑や溝・落込みが検出され前期段階の集落遺跡であることが判明しています。遺跡東側には、自然河道が検出されています。また、早い時期での河内・紀ノ川流域からの搬入土器も複数出土しています。

唐古・鍵遺跡から南東2kmの東井上(いね)遺跡は、戦前には既に前期土器を含む遺物包含層が確認されていましたが、その後、中期土器や後期の堅穴住居を含む遺構群が検出されています。また、同じく遠望ですが、唐古・鍵遺跡から南2kmにある



阪手遺跡からは、水田遺構は検出されていませんが弥生後期の井堰(しがらみ)が検出され、井堰を中心に、南北・北西・南東方向に浅い溝(上写真:堰と溝遺構:県調査報告書)が検出され、微高地形を利用した後期の水田遺構とされています。

昼食後に訪れる小阪里中遺跡は、唐古・鍵遺跡より南に500mに位置し、後期の溝・土坑が複数検出され中期後半の甕棺墓と推定される土坑も検出されています。後期を中心に小規模の集落活動が想定され、この時期の小規模な集落活動は、唐古・鍵遺跡の周辺で確認されます。

最後に、唐古・鍵遺跡より南600mに位置する法貴寺齋宮前遺跡と小阪榎木遺跡と小阪細長遺跡を経て阪手東遺跡に到達します。法貴寺齋宮前遺跡と小阪榎木遺跡は、農業管水路改修工事(東西延長630m)に伴う調査で、前者からは中期後半の大溝や方形周溝墓、後者は後期から庄内期に及ぶ多数の溝や土坑が検出されています。さらに、南400mに位置する阪手東遺跡からは、中期中葉の大型の方形周溝墓(14×16m)を含む16基がまとまって検出され、その上層(明褐色粘質土)から終末期～古墳期初頭の畦畔状遺構が足跡とともに検出されています。法貴寺齋宮前遺跡と小阪榎木遺跡と阪手東遺跡は、中期中頃から継続する集落域・墓域・生産域を有する一体遺跡の可能性がります。

(編集委員)

東 治雄 井上知章 植田洋高 谷口敬子 福島道昭 藤原隆雄 万徳順一 宮川真由美